女子短大生の学習意欲に関する研究

武　藤　玲　路

A study on learning motivation of female college students

Ryoji MUTO

キーワード：学習意欲、自己効力感、自己決定理論、達成動機、自己調査学習

１．問題と目的

１．１　学習意欲と内発的動機づけ

中央教育審議会は2012年に「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて　～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」において、将来の予測が困難な時代の到来に対応できる人材の育成では、様々な学士力を能動的学習（アクティブ・ラーニング）によって培い、生涯学び続ける力、主体的に考える力、自立して生きる力を持った有為な人材の育成が重要であることを提唱した。これらの力を生涯学び続けることができる生涯学習力の原動力は「学習意欲」である。

最新心理学辞典によると、学習意欲は「学習への動機づけ」と同義であるが、意欲という言葉には自分の行動について自己決定する意味があり、人から強制されて生じる動機づけは該当しない。心理学では、動機づけには「内発的動機づけ」と「外発的動機づけ」の二つがあるとしている。内発的動機づけとは、金銭を得るためとか、誰かに褒められたいという外部からの動機づけではなく、自分の内部から起こる動機づけであり、好奇心や探究心が元になっていることが多いとされている。一方、外発的動機づけは、外部から報酬や賞賛を得ることを目的とした動機づけのことで、「お金が欲しいから働く」、「テストで赤点を取らないために勉強する」などの行動が該当する。内発的動機づけは、行動そのものが目的であることが多く、外発的動機づけは目的のために行動することが多い。

内発的動機づけは、「楽しい」という感情を得るためのものと言っても過言ではない。内発的動機づけのメリットは、第一に「心の満足感を得られること」である。「やらなければならない」ではなく、「やりたいからやる」。これが内発的動機づけの特徴であり原動力である。その気持ちは、人間が生きていく上での生きがいにもなり、幸福になるためのカギと言える。従って、内発的動機づけは持続性を持つというメリットもある。

内発的動機づけを高めるためには、内発的動機づけを「外発的動機づけから派生させる」ことが理想的である。近年、教育現場では内発的動機づけこそが学習意欲の中心的なものという考えが浸透している。教室場面で内発的動機づけを高めるということは、具体的には授業の到達目標の設定、教材や教授法の開発、成績評価基準やフィードバックの方法などを工夫して、学習者の認知構造を揺さぶり、主体的な学習を促すことを意味している。

１．２　学習意欲の規定要因

学習意欲を規定する要因として、原因帰属、自己効力感、自己決定がある。

「原因帰属」は学習結果（成功・失敗）の理由づけを行うことであり、適切な帰属をすることが自尊感情や自己効力感を高めることに繋がるとす

るものである。特に、原因帰属の中の「内的帰属」は学習結果の原因を努力や能力の内的要因に帰すことで、課題の困難度や運などの外的要因に帰す「外的帰属」に比べて、学習意欲を規定するとされている。例えば、失敗を能力に帰属すれば動機づけは低下するが、努力に帰属すれば学習意欲は向上する可能性が高いという現象である。

「自己効力感」は自分自身にその学習目標を達成する力があるという確信や自信であり、過去の自分の実績や他者からの言語的説得などによって形成されるものである。高い自己効力感は学習の持続性や効果的な学習方略の選択に繋がることが知られている。また、自己効力感は自己成就予言を生じさせる。「自己成就予言」とは、何らかの予期が単なる思い込みだったとしても、意識的または無意識的にその予期を実現するような行動をとることによって現実になる現象である。

「自己決定」は自己の行動を自分自身で決定しているという認識であり、内発的動機づけや有能感を高め、自律的な行動を促すとされている。自己決定に関する「自己決定理論」は、人間の動機づけ（モチベーション）についての基本理論で、やる気を引き出す動機づけは自分が決めた程度（自己決定）が大きいほど大きくなるという理論である。自分が考えて決めた自己決定は、内発的な動機づけとも言われ、自律的でやり抜く意思が強固になるとされている。

学習意欲を高める他の要因に達成動機がある。「達成動機」とは、やりがいのある目標を成し遂げたいという動機、困難な物事を迅速かつ立派にやりとげるために努力しようとする動機のことで、「現状では難しいが、頑張れば何とか達成できるかもしれない」と思える程度の適度な難易度の目標に対して達成動機が高まるとされる。また、達成動機は「成功したい」と思う成功接近欲求と「失敗したくない」と思う失敗回避欲求から成り、両者は成功／失敗の主観的な確率、即ち、自己効力感に影響されるとも言われている。

達成動機と関連した理論に達成目標理論がある。「達成目標理論」とは、人は自分の有能さを求め、自分の能力を査定するための達成目標を設定するという理論である。どのような目標を設定するかは知能に関する二つの「知能観」による。一つは知能を本人の意志で変化可能なものと見る「増大理論」で、もう一つは知能を制御不能で変化し難い実体と捉える「実体理論」である。知能観として増大理論を持つ人は努力により能力を伸ばせると考えるため、学習して能力を伸ばすことを目標とする「学習目標」を持つ。一方、実体理論を持つ人は能力を固定的なものと捉えるため、能力が低いと判断されるのを避けて能力が高いと判断されることを目標とする「遂行目標」を持つとされている。また、遂行目標を持つ人で自分の能力に自信がある場合は、困難な課題にも果敢に挑戦し努力する熟達志向を取り易いが、自分の能力に自信がない場合は、挑戦を避けてすぐに無力感を抱き易いとされている。

さらに、教育者側の要因として代表的なものに、教師がこの子は伸びるという期待を抱くことが子どもの学習意欲に反映される「教師期待効果（ピグマリオン効果）」がある。

1．3　学習意欲を高める自己調整学習

最新心理学辞典によると、近年、教育の現場で自己調整学習を導入する傾向が強くなっている。「自己調整学習」とは学習過程のすべてに学習者自身が能動的にかかわり、自己の認知活動や行動をコントロールしながら、効果的に学習目標を達成していこうとする学習形態のことを言う。これは、自己の学習における自己調整機能と自律性、自己責任の必要性を重視する学習理論に基づいている。

自己調整学習を導入するようになった背景には、「生涯学習」への認識の高まりがあると言える。近年、生涯を通じて絶えず自己啓発を続ける生涯学習への移行が強調されるようになり、学校教育に求められる役割として、生涯学習を前提とした自己教育力の育成が重視されている。自己教育力は主体的に学ぶ意志、態度、能力を包括した概念であり、自律的に学習して自己を向上させ社会の変化に主体的に対応できる能力とされる。

自己調整学習では、学習を効果的に進行させる

ための「学習方略」が使用される。基本的な学習方略としては、自己評価、知識の体制化と変換、目標設定とプランニング、情報の探索、記録、自己モニタリング、環境構成、自己帰結、リハーサルと記銘、社会的援助の探求、記録のレビューが挙げられる。

自己調整がうまく機能するかどうかは、これらの学習方略をどのように選択し、それをいかに効率よく使用するかにかかっており、その中心的な役割を果たすメカニズムがメタ認知的活動である。「メタ認知的活動」は、メタ認知的モニタリングとメタ認知的コントロールの二つの過程によって支えられている。メタ認知的モニタリングは、現在進めている学習活動から自己の遂行状況を確認し、学習がうまく進行しているかを点検・評価する。そして、その判断に基づいて学習目標や学習方略を変更・修正する過程がメタ認知的コントロールである。この二つの過程が相互に効率よく働くことで洗練された自己調整が実現するとされている。

1．4　本研究の目的

短期大学基準協会の認証評価や文部科学省の私立大学等改革総合支援事業の評価項目にも示されているように、これからの短期大学等の高等教育機関には、教育の質保証、質的転換、特色化が強く求められている。これらを実現するための教学マネジメント体制の構築やPDCAサイクルの確立には、上述した学習意欲の高揚が必要不可欠である。特に、アクティブラーニングが目指す「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」には、学習意欲が重要な原動力となっている。

そこで本研究は、「女子短大生の学習意欲に関する研究」の第一段階として、学習意欲の規定要因に関する自由記述の質問紙による予備調査を実施し、後続の本調査に資する基礎データを収集することを目的とした。

2．方　　法

⑴　調査対象

長崎女子短期大学　生活創造学科ビジネス・医療秘書コースの女子学生、１年生26名（平均年齢19歳）を調査の対象とした。

⑵　調査時期・場所

2019年12月中旬に上記の短期大学内の教室で調査を実施した。

⑶　質問紙

質問紙は「やる気（意欲）」に関する質問にすべて自由記述で回答する形式とした。質問項目数は８項目で、回答の所要時間は約10分間であった。

⑷　結果処理法

調査結果の処理では、短大時代に「最もやる気が出た授業」「最もやる気が出た活動」「最もやる気が出たエピソード」に関する自由記述の回答について、類似するキーワードを抽出・分類して集計した。

3．結　　果

3．1　「最もやる気が出た授業」について

⑴　授業科目の名称

図１は、短大時代に「最もやる気が出た授業科目の名称」である。横棒グラフの並べ方は上から「ビジネス系」「秘書系」「コミュニケーション系」「その他」の領域別に並べている。最も多かった回答は「ビジネス文書作成」と「生涯スポーツ」であり、科目の領域に類似性はない。よって、学生のやる気と「授業科目の領域」には関連がないことが分かる。

⑵　授業の到達目標

図２は、「最もやる気が出た授業の到達目標」である。最も多かった回答は「検定試験の合格」であり、その他のすべての回答が自分の将来のために役立つ知識や技能の習得である。よって、学生のやる気には「就職や将来の役に立つスキルアップ」が関連していることが示唆される。

⑶　授業の内容や教え方

図３は、「最もやる気が出た授業の内容や教え方」である。最も多かった回答は「検定問題の回答と解説」であり、その他のすべての回答が演習や実習などの能動的で主体的な学習である。よって、学生のやる気には「アクティブラーニングの要素」が関連していることが分かる。

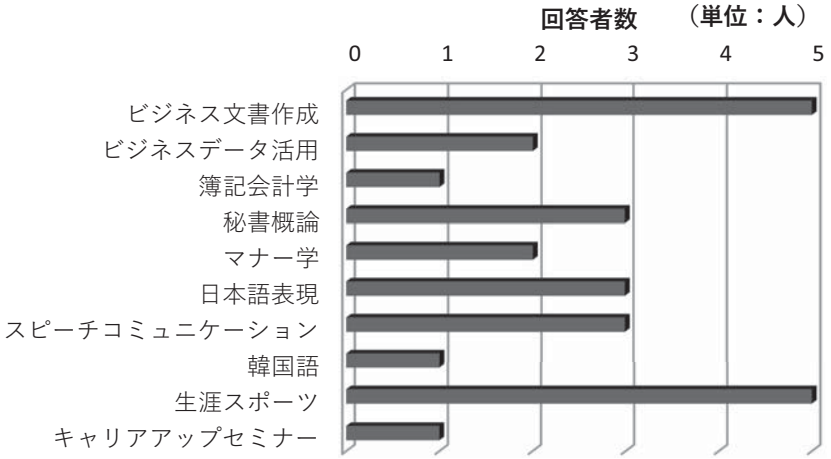

図１．最もやる気が出た授業科目の名称（n＝26）

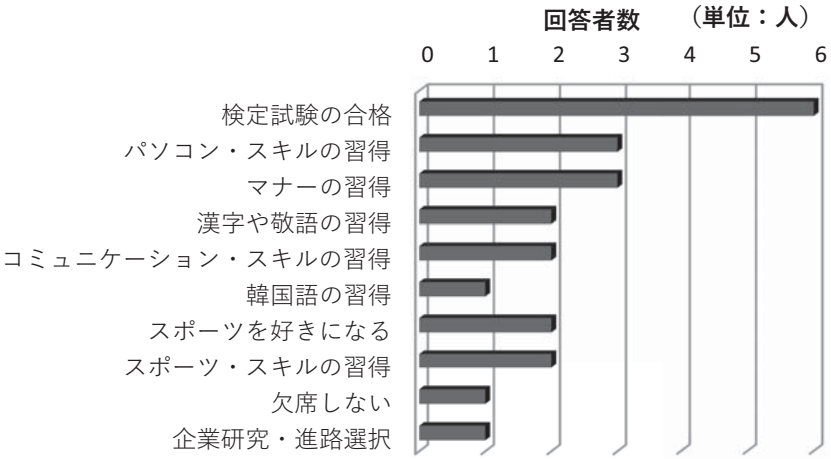

図２．最もやる気が出た授業の到達目標（n＝26）

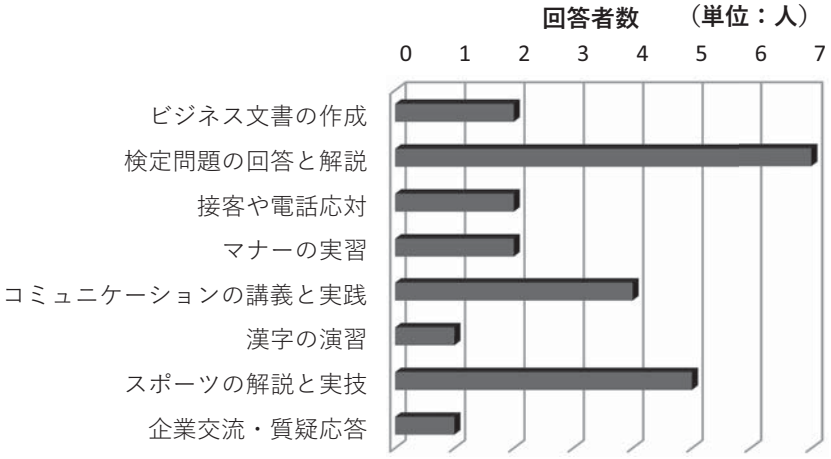

図３．最もやる気が出た授業の内容や教え方（n＝26）

⑷　授業の特色や魅力

図４は､｢最もやる気が出た授業の特色や魅力｣である。最も多かった回答は「実践的で将来の役に立つこと」であり、その他の回答は「分かりやすく理解しやすい」「先生が優しく教えてくれる」「授業が楽しい」など、すべて教員の教育力や人格の要素を含んでいる。よって、学生のやる気には「教員の教育力や人格」が関連していることが示唆される。

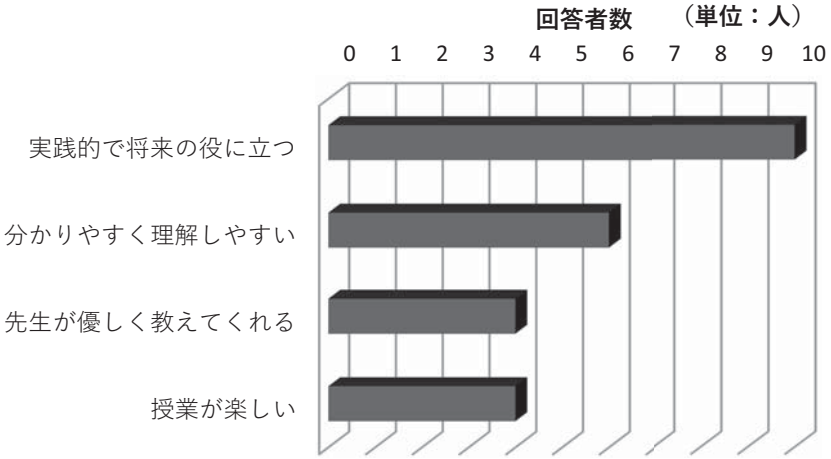

図４．最もやる気が出た授業の特色や魅力（n＝26）

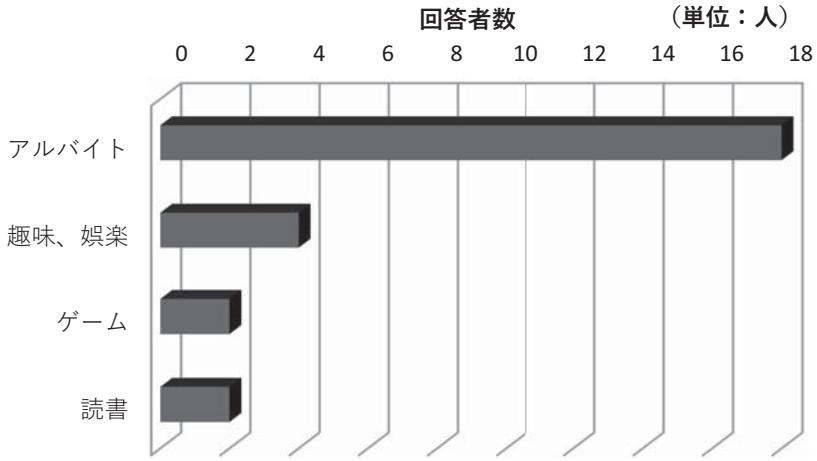

図５．最もやる気が出た活動の名称や内容（n＝26）

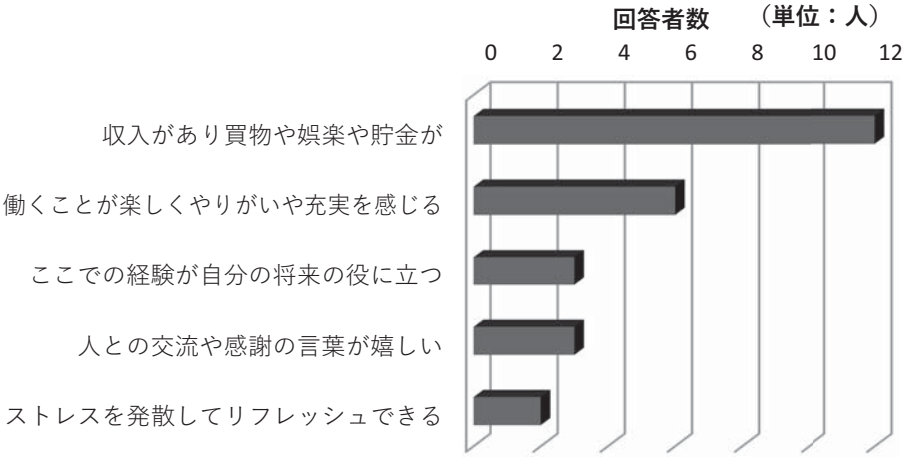

図６．最もやる気が出た活動の魅力（n＝26）

３．２　「最もやる気が出た活動」について

⑴　活動の名称や内容

図５は、短大時代に「最もやる気が出た活動の名称や内容」である。最も多かった回答は「アルバイト」である。よって、学生のやる気は「金銭的報酬を伴う労働」と関連していることが分かる。

⑵　活動の魅力

図６は、「最もやる気が出た活動の魅力」である。最も多かった回答は「収入があり買物や娯楽や貯金ができる」であり、その他の回答は「働く

ことが楽しくやりがいや充実を感じる」「ここでの経験が自分の将来の役に立つ」「人との交流や感謝の言葉が嬉しい」「ストレスを発散してリフレッシュできる」など、すべて金銭的報酬や充実・向上・感謝などの心理的報酬の要素を含んでいる。よって、学生のやる気には「物理的報酬と心理的報酬の両方」が関連していることが示唆される。

3．3 「最もやる気が出たエピソード」について

(1) 最もやる気が出た言葉や態度

表1は、「最もやる気が出た言葉や態度」である。これらの回答には、前述の先行研究で述べた「自己調整学習」の重要な心理的要因である「心理的報酬」「自己効力感」「自己決定」「達成動機」が含まれている。よって、学生のやる気の高

表1．最もやる気が出た言葉や態度の心理的要因

自由記述の回答	心理的要因
自分で稼いだお金を自分の好きなことに使う	物理的報酬
資格をたくさん取得しよう	心理的報酬
好きなことはやる気が出る	心理的報酬
できると思えばできる、できえないと思えばできない	自己効力感
笑顔、ありがとう	自己効力感
やるかやらないかは自分次第という言葉	自己決定
推しは推せる時に推せ	自己決定
企業の方と接し、進路について考えたとき	自己決定
友達と一緒に検定試験対策を行った	達成動機
友達が頑張っているのを見て自分も頑張ろうと思えた	達成動機
頑張れ	対人効果
推しのためにお金を稼ぐ	援助行動
親にお金を払ってもらっているんだから頑張らないと	援助行動

表2．最もやる気が出た状況の心理的要因

自由記述の回答	心理的要因
お金が入るとき	物理的報酬
バイト代が出たとき	物理的報酬
バイトでお金が入って自分の好きなように使えるとき	物理的報酬
貯金をすることができるとき	物理的報酬
目標を達成できたらご褒美があるとき	物理的報酬
自分で稼いで貯めたお金で幸せと感動をもらえるとき	物理的報酬
資格取得のため	心理的報酬
これを乗り越えれば楽しみが待っていると思って努力する	心理的報酬
接客していてまた来るね、会いに行くねと言われたとき	自己効力感
企業説明会のとき	自己決定
自己管理によって決まる	自己決定
友人が辛くても頑張っているから自分も頑張ろうと思ったとき	達成動機
みんながバイトでお金を稼いでいたときに頑張ろうと思ったとき	達成動機
短大祭のときに友人達で協力して活動することができたとき	対人効果
バイトで先輩に分からないことがあったら聞いてと言われたとき	援助行動

揚には「自己調整学習の心理的要因」が有効であることが示唆される。

⑵　最もやる気が出た状況

表２は、「最もやる気が出た状況」である。これらの回答には、表１と同様に「自己調整学習」の重要な心理的要因である「心理的報酬」「自己効力感」「自己決定」「達成動機」が含まれている。よって、学生のやる気の高揚には「自己調整学習の手法」が有効であることが示唆される。

以上が本稿の「学習意欲（やる気）」に関する予備調査の結果である。

４．ま と め

本研究は、女子短大生を対象として学習意欲の規定要因に関する予備調査を実施し、後続の本調査に資する基礎データの収集を目的とした。質問項目は「やる気が出た授業」「やる気が出た活動」「最もやる気が出たエピソード」に関する自由記述とした。

その結果、「最もやる気が出た授業」では、①学生のやる気と「授業科目の領域」には関連がなく、②「就職や将来の役に立つスキルアップ」、③「アクティブラーニングの要素」、④「教員の教育力や人格」が関連していることが分かった。また、「最もやる気が出た活動」では、⑤学生のやる気と「金銭的報酬を伴う労働」、⑥「物理的報酬と心理的報酬の両方」が関連していることが示唆された。さらに、「最もやる気が出た言葉や態度」では、⑦学生のやる気の高揚には「心理的報酬」「自己効力感」「自己決定」「達成動機」などの「自己調整学習の心理的要因」が有効であることも示唆された。⑧このことについては、「最もやる気が出た状況」においても同様の結果が示された。

以上の結果から、女子短大生の学習意欲（やる気）は、「就職や将来の役に立つスキルアップ」「アクティブラーニング」「教員の教育力や人格」「金銭的報酬を伴う労働」「物理的報酬と心理的報酬」、そして「自己調整学習の心理的要因」と何らかの関連があることが示唆された。

今後は女子短大生の学習意欲に関する質的調査を実施し、近年、教育の現場で推進されている「自己調整学習」に関する「学習プログラム」と「教授法・教材」の開発について、継続的に検討を重ねて行きたいと思う。

参考資料

１）鹿毛雅治、「学習動機づけ研究の動向と展望」、教育心理学年報、第57集、155～170、(2018)

２）ヘファ・ベンベヌティ（2018)、「学業的成功と自己効力感、家庭学習　―なぜ学習の自己調整と学業的満足遅延が必要なのか？―」、教育心理学年報、第57集、232～239、(2018)

３）伊藤崇達、「自己調整学習の成立過程　学習方略と動機づけの役割」、北大路書房、(2009)

４）Nakaya, M.、Tanaka, A.、Ito, T.、Toyama, M.、「学習動機づけ研究の未来」、教育心理学年報、第57集、250～257、(2018)

５）ニルソン, L. B、「学生を自己調整学習者に育てるアクティブラーニングのその先へ」、北大路書房、(2017)

６）中央教育審議会、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて　～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」、１～26、(2012)

謝　辞

本稿に掲載した調査の実施および集計・分析に際して、長崎女子短期大学事務職員の田頭未幸様に多大なるご尽力を賜った。ここに記して感謝の意を表したい。